

田中秀和著

## 『幕末維新期における宗教と地域社会』

小林 文雄

本書の著者である田中秀和氏は、宗教史・地域社会史の領域で精力的に論文を発表され、また北方史研究者の若手を牽引する中心的存在として活躍していたが、惜しくも一昨年の四月に三六歳という若さで急逝された。本書は、その田中氏が亡くなる直前まで推敲を重ね、おそらく博士論文として提出される筈であつたろう原稿を、多数の方々のご尽力によつて公開したものである。本来ならば全くの素人である私に書評する資格などともよらないが、田中さん（あえてこう呼ばせていただく）を慕つてきた後輩の一人として、つたない紹介を記すことにしたい。

本書は、三編十四章、全体で四二八頁にもおよぶ大著で、既発表論文をもとにしてはいるが、それらを配列しただけの単なる論文集ではない。すでに学会誌・紀要等に掲載された論文であっても、博論全体の構想に沿った形で解体・統合がなされているため、書き下ろしに近く、その意味では遺稿集というより田中さんの最後の著書という方が適切であろう。

三部構成のそれぞれは、第一編「近世の地域社会と在村小社」、第二編「明治初期の宗教政策と地域社会」、第三編「東北・北海道の統治と宗教政策」、とタイトルが付けられている。もちろんそれは相互に独立

したテーマではなく、全体として、田中さんが今までどのような点に問題関心を抱き、何を明らかにしようとしていたのか、研究の全体像が読者に直裁に伝わるように本書は構成されているのである。その最も根底にあるテーマは、まず第一に「庶民にとって神仏分離とは何だったのか。」という問いかけであり、第二に北海道・東北という地域の個性の解明であつた、とまとめられるのではないだろうか。このような、自己のテーマを一貫して追求するという研究姿勢、研究の情熱に第一に感銘を受けたのであつた。

以下、編ごとに内容を紹介する。

第一編「近世の地域社会と在村小社」は、つぎの五章から成っている。「第一章 地域権力と宗教」、「第二章 地域社会と在村小社」、「第三章 宗教者組織と霞（掠）―地域社会の宗教的環境―」、「第四章 幕末維新期の地域社会と在地神職の動向」、「第五章 幕末期の藩社会と民衆―近世北奥の寺社縁起と田村麻呂伝承―」。

この編は、北奥をフィールドにして、近世の藩権力がいかなる宗教支配を実現させていたのか、支配の対象となる在村小社・修験・神職はどのような活動を展開させ、地域民衆といかなる関係を結んでいたのか、という課題を解明した編である。ここでは、弘前藩においては成立期に主な寺社を藩の祈祷システムに組み入れたが、在村小社の把握までにはいたらず、在村小社に対する支配が確立するのは宝暦の藩政改革が契機となったこと、藩は神職組織を媒介として在村小社を把握し、「無縁の社家」の排除をおこなつて神社支配を完成させたこと等々が述べられている。また、幕末期になると、寺院の風儀の悪化や統制外にある神々の

流行による民衆の動揺が、藩の既存の宗教統制の枠組みの崩壊をもたらし、藩権力の危機意識が高まってゆく。そのなかで、藩は神職の取り込みを志向し始め、神職も吉田家の偽文書を媒介として「文武士」としての身分意識を主張し、国恩に見合う役の遂行という形で自己意識を変質させていったことが明らかにされている。つまり、この編では、近世の地域社会における宗教が、藩権力・宗教者（＝修験・神職など）・民衆という三つの集団の絡み合いとしてトータルに把握され、明治初期の神仏分離政策が近世段階での地域社会の動向の帰結である、という田中さんの主張が非常に説得力を持って書かれている。

第二編「明治初期の宗教政策と地域社会」には、「第一章 寺社領の変遷と神仏分離政策の動向―弘前藩を事例に―」、「第二章 明治初期の弘前藩と神仏分離」、「第三章 明治初期の神仏分離と修験道―修験者の仏教帰入を中心に―」、「第四章 明治初期の神仏分離と地域社会―秋田藩を事例に―」の四つの論文が収められている。この編は、田中さんの研究の原点ともいえる中心的な部分となっており、神仏分離政策を廃仏毀釈とセットでしか評価しなかった従来の研究史や、明治政府による強制的かつ一方的な神仏分離政策という理解を排し、いわば「上からの神仏分離」にたいして、地域社会の独自の事情をふまえた「下からの神仏分離」の実態を描き出している。たとえば、第一章では、弘前藩の寺社領の変遷、とくに寺社の減録の割合から、明治初年の寺院の廃合は廃仏毀釈の方向性を持っていないことを実証しており、廃仏毀釈のおこなわれなかった藩の寺社領政策と神仏分離政策との関連に着目することによって、神仏分離政策が近世期の宗教政策やイデオロギー政策に規定さ

れ、その延長線上にあることが見事に解明されているのである。

第三編「東北・北海道の統治と宗教政策」は、「第一章 近世後期の蝦夷地直轄と宗教政策―蝦夷地政策と蝦夷三官寺―」、「第二章 幕藩権力の解体と北海道―幕末維新期における北方地域の権力編成―」、「第三章 北海道における宗教政策の展開とその地域的特質」、「第四章 明治初期の国民教化と東北」、「第五章 明治初期の国民教化政策と北海道」の五論文で構成されている。この部分は、一・二編をとおして論じてきた、近世から近代にかけての民衆にとつての宗教変容を、「蝦夷地」という地域的特質を前面に出して考察したものと捉えることができるが、さらに進んで、近代国家が東北・北海道をどのような地域として編成していったのか、地域から明治政府の権力的性格を照射するという斬新な視角が提示されている。

本書の内容はここに紹介した以上に豊富であり、論点も多岐にわたっているが、全体を通していえるのは、第一に、精緻な実証性に貫かれている、ということである。神仏分離政策を決して中央政府による全国一律の政策と捉えず、宗教者の側の記録を発掘しそれを丹念に読み込むことによって、地域の信仰の内部にまで降りてゆき、そこから論を立ち上げるという方法を取っているので、説得力を増しているといえる。

第二に、第一の点とも関わるが、徹底して地域社会の側、庶民の側から宗教をとらえ直すという視点にこだわることによって、従来取り上げられることのなかった史料の読み直しをはかり、その結果全く新たな論点を提示したことを挙げたい。たとえば、第一編第五章では、荒唐無稽な内容を持つとして敬遠されてきた「寺社縁起」を歴史学の立場で真正

面から取り上げ、縁起相互のわずかな異同に着目してその変遷および作成意図を明らかにし、縁起にひそむ意識を浮かび上がらせている。由緒や伝承などから地域住民の自己認識や民衆意識を読みとる手法は、いまでも珍しくなくなったが、ここで重要なことは、縁起自体を藩権力・宗教者・民衆三者のさまざまな意識のせめぎ合い、あるいは相互交流の「場」としてとらえている点ではないかと思われる。元禄期や安政期という、異民族が藩・民衆に強く意識される時期に現れることを指摘すると同時に、そうした田村麻呂伝承のもつイデオロギー機能が、民衆の一定の「合意」のうえにたつたものでもあるとする見方は、まさに「下からの視点」を重視した田中さんならではの位置づけ方である。

また、第一編第四章での、神職による「乗打咎」の事例や祭礼の際に槍を持つか否か、という可視的・象徴的行為から神職の自己認識の変質を読み取る手法はたいへん鮮やかであり、その分析を通して「神職身分とは何か」という重要な問題への解決の糸口が示されている。儀礼に着目した身分論の先駆的な業績であり、なおかつ身分の動態的把握という点でも注目すべき論点が提示されているといえよう。

このような、史料に新たな光を当てて分析をする箇所は随所に見られ、これが本書の魅力となっている。

田中さんは研究書を含め三千冊を越える蔵書にくわえ膨大な量の研究資料を持っておられ、ご自身の遺志により、蔵書の大部分は親友の勤務先である韓国の大学に寄贈、研究資料は弘前大学に贈られることになった。その際、私は田中さんの研究仲間とともに蔵書・資料を整理する機会があったが、その時、田中さんの誠実で繊細な性格そのままに、遺漏

なくご自身できちんと整理してあったのに驚いた。本書のもとになった原稿と論文の順序を決めた構成案も、フロッピーディスクのなかから発見され、しかもそれは試案から最終稿まで、田中さんの思考過程がたどれるかのように、推敲の跡を残したままの状態で管理されていたのである。その意味で、本書が確定稿である保証はなく、章節の表記の仕方に不統一がみられるのは確かだが、それは体裁の統一などといった些細な点に拘泥するよりも田中氏の遺志を尊重して生の声を伝えたいという編集者の方々の考えによるものであるであろう。そしてその試みはたいへん成功していると思う。

田中さんは、学界に非常に多くの成果と、多くの課題を残したまま逝ってしまった。近代北海道・東北地域史の再構築、近世から近代にかけての修験や神職らの地域社会における諸活動の実態解明、寺社縁起のさらに基層にある民間伝承から奥羽民衆の自己認識を探る試み等々、田中さんの構想はもう聞くことができなくなってしまった。田中さんの提起した問題群に取り組み、継承して行くことが田中さんへの供養となるのではないだろうか。

評者の能力不足から、たいへん偏りのある紹介となつてしまい、曲解も多いことと恐れる。是非、多くの方々に、実際に手にとってお読みいただき、そのすばらしさを味わっていただきたくことを願って、紹介を終えたい。

田中さん、ご冥福をお祈りします。

(清文堂 A5判 四三四頁 本体九八〇〇円 一九九七年九月刊)  
(こばやし・ふみお 山形県立女子短期大学講師)